2017.8.19

大通街宣

1. 皆さん、おはようございます。岩本です。8 月 15 日、敗戦記念日での 2 人の公人の立ち振る舞いは、対照的なものでした。お一人は天皇、もう一人は安倍晋三首相です。天皇と安倍首相は、戦争責任を負うべき戦争指導者の子どもであり、孫でした。戦争責任は、不正な侵略戦争を開始した政治家と軍指導者が負わなければならない責任です。それとは別に、直接戦争に参加しなかった世代には、違ったかたちの責任があると思います。これを「戦後責任」と呼びたいと思います。戦後責任とは、不正な侵略戦争で傷つき死んでいった人たちに対して、真実から目を背けることなく誠実に償いを行い、和解と平和を作ることにたゆまず努力する。そういう責任です。天皇と安倍首相において、この戦後責任への向き合い方が対照的でした。
2. 今年の全国戦没者追悼式での天皇の立ち振る舞いを見て、胸が突かれる思いでした。天皇が式典から退場するために席を立ったとき、しばらく、「全国戦没者之霊」と書かれた標柱を身じろぎもせず凝視しておりました。来年にも退位を控えた天皇は、そのとき、何を思われたのか。天皇は、慰霊と和解のために戦地をまわられ、平和を誰よりも祈念されていました。日本国と日本国民統合の象徴として、日本国憲法の枠内において、全身全霊を挙げて戦後責任を果たそうとされてきました。その来し方を振り返って、自らが天皇として戦後責任を十分に果たすことができたのか、自問されているように私には見えました。
3. 「過去を顧み、ふかい反省」という言葉を述べた天皇とは対照的に、安倍首相は、5 年連続で「おわび」も「反省」も口にしませんでした。日本の戦死者 300 万人の霊に言及しても、15 年にわたるアジア・太平洋戦争で犠牲となったアジアの人びとにまったく触れませんでした。日本の戦没者を追悼するための式典であるから当然だ、という人もいるかもしれません。しかし、戦争には相手がいることを忘れてはなりません。しかも、その相手が、自分たちの不正な侵略戦争の犠牲になったことを思えば、一国の首相が「おわび」と「反省」の言葉を述べるのは、政治家としての義務とさえいえるでしょう。それこそが、私たちが果たさなければならない最低限の戦後責任のはずです。それすら、安倍首相は拒否しつづけているのです。
4. 安倍首相は、平和主義を基本原則とし、戦争を永久に放棄し、軍隊の不保持を宣言した日本国憲法にとって、まさに「マイナスの象徴」です。日本国憲法のもとにおいて、日本国憲法の理念とは真逆のところにいるのが安倍首相です。戦争責任を負わなかった岸信介もそうです。日本国憲法がある限り、安倍首相も岸信介もマイナスの象徴です。では、プラスになるためにはどうしたらよいか。そうです。日本国憲法を全否定するのが一番簡単な方法です。だからこそ、岸信介と同じく、安倍首相もまた、日本国憲法を破棄することに執念を燃やすのです。安倍首相による改憲は、絶対に許してはなりません。

5. ここに集う私たちは、岸信介とも安倍晋三とも違う。戦後を生きる私たちには、またまだ果たさなければならない戦後責任があります。その責任を記した文書こそが日本国憲法なのです。東アジアにおける和解と平和の構築のために私たちがすべきは、隣国をいたずらに挑発し、軍事力を高めることではありません。和解と平和の構築は、非暴力による真摯な話し合いを通じてしか実現しません。この 8 月、もう一度、日本国憲法の原点に立ち返って、和解と平和の構築のための運動を粘り強く進めていきましょう。ともに頑張りましょう。本日はどうもありがとうございました。